

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01079

研究課題名(和文)初年次教育としての体育実技・演習の教育効果に関する研究

研究課題名(英文)Educational Effects of Physical Education as First Year Experience

研究代表者

北 徹朗(Kita, Tetsuro)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：60570447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：大学以前の教育内容を整理し大学1年と高校3年生対象調査を経て学習準備状況確認テストを開発した(論文名：大学教養体育における高大接続についての一考察―ベースボール型授業におけるレディネステストのトライアル)。コミュニケーション・ルーブリック開発のためにリフレクション・シート作成、全国調査を経てルーブリックを開発した(論文名：大学体育授業におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの開発の試み)。英語による教養体育実技についてアンケート調査や担当教員に対するヒアリングを行った(論文名：授業用ウェブサイトを活用した英語による体育実技)。大規模な卒業生調査を実施し2020年度内に論文誌に掲載される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教養体育の授業は全国の殆どの大学で開講され、必修科目として開講されている場合も多い。いわゆる大学設置基準の大綱化以前は体育科目は必修とすることが定められていたが、当時から、学校体育の内容の繰り返しであるとか、学習目標が明確でない、等の批判があった。そこで本研究では、これらの点を改善して行くための基礎資料の収集と授業教材(評価尺度)の開発のために調査研究を実施した。高校3年生および大学1年次生、そして卒業生に対して数百人を対象に分析をすすめ、有用性の高い資料を得た。こうした知見に加え、国を挙げて推進されているグローバル人材育成推進事業における体育科目での事例と可能性についても有益な事例を示した。

研究成果の概要(英文)：The educational contents before the university were evaluated. And we got the result of the survey for the first year of university and the third year of high school. After that, the readiness test was developed. We also developed a communication rubric based on the results of a questionnaire survey. We conducted a questionnaire survey on physical education in English and interviewed teachers.

研究分野：高等教育論

キーワード：レディネス・テスト 初年次学生 初年次教育 ルーブリック 大学教養体育 英語による授業査 卒業生調査 入学前調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学教育のグローバル化が進展し、教育の規格化や国際競争が進むにつれて、大学教育の質保証が強く求められている。特に、近年では、学生の学修成果の評価に先進各国が取り組んでおり、経済協力開発機構 (OECD) も国際調査 (AHELO や PIAAC) を行っている。大学教育のユニバーサル化により新入生の資質と経験が多様化している日本においても、学修成果の評価指標開発が大きな課題となっている。現在、この課題については、各大学が取り組むとともに、学会レベルでも取り組みが始められている。例えば、大学教育学会では「学士課程教育における共通教育の質保証」に取り組み、日本体育学会では「スポーツ・体育学検定」の準備を始めている。本研究は主に教養体育・健康教育の学修成果評価指標を開発し、その教育効果の測定を行うものである。

大学の教育効果に関する研究は、学生の態度変容や知識・技能の獲得に対する大学教育の影響を調査する方法が取られてきた。米国では 1940 年代から始まっており、伝統的な研究方法は卒業生を対象にした卒業生調査 (Alumni Studies や Alumni Survey 等) である。体育や健康に関する卒業生調査は 1970 年代と 1980 年代に多く見られる。

また、近年では、学修成果の評価に関する大規模で長期にわたる調査が進められており、データが蓄積されている。カリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所では、大学間連携による大規模な学生調査研究プログラムを 1973 年から行っており、現在では 1,900 校が参加し、1,500 万人を超える学生のデータを収集・分析している。日本では山田礼子 (同志社大学) らがこの調査の日本版を開発し調査をしており、これらの研究対象は、新入生から在学学生、卒業生へと広がっている。

本研究の代表者および分担者は、これまでに大学教養体育の研究を進めてきた。研究代表者の北 (2014) は教養体育の効果について、インターネットを使った調査により「若年女性の運動継続や開始、健康的習慣形成に教養体育の効果が見られた」ことを明らかにした。研究分担者の小林 (2014) は、卒業時の調査によって、教養体育は学生から高く評価されたことと、卒業時調査の課題を明らかにした。また小林は、前述の大学教育学会と日本体育学会の成果指標開発にも加わってきた。研究分担者の平工は「体育の宿題を用いた女子大学生向けの体育授業プログラム開発」についての科研費 (基盤 C) を得てその成果を刊行している。同様に中山 (2012) は「大学体育授業が学士力とメンタルヘルスに与える影響」について検討している。

2. 研究の目的

本研究は大学初年次における体育実技・演習の教育効果を測定する評価尺度を開発し、全国規模の調査を行い、その教育効果を明らかにすることが目的であった。研究の手順として、大学教育のユニバーサル化により多様化が進む学生に対する教育の効果を測定するために、新入生の状況を把握しておく必要があるため、そのためのレディネス・テストを開発し、全国規模で調査を行う。この調査は山田礼子らの JCIRP Freshman Survey の手法と研究分担者の小林ら (1995) のレディネス・テストの成果を参考にする。また、初年次教育の科目の中の体育授業の役割や特徴を調査するために、1 年次生に対するアンケート調査を実施する。それと同時に、大学の体育授業ではコミュニケーション能力を高める可能性があることが知られているが、その効果的な方法論の充実が急務である。そこでコミュニケーション能力を高めるためのリフレクション・シートを開発し、教育効果を検証する。さらに、近年、英語による授業を行う大学が増えてきており、今後も増えることと見込まれることから、その教育効果や問題点を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の目的は、大学初年次における体育実技・演習科目の評価尺度を開発し、全国規模で教育効果を測定することであり以下の方法で研究を実施した。

1. 新入生の状況を把握するレディネス・テストの開発
2. 初年次科目の嗜好を探るための初年次生に対するアンケート調査の実施
3. 授業直後に行う教育効果の評価尺度開発と全国規模での実施
4. 卒業時と卒業後に行う教育効果の評価尺度開発と全国規模での実施
5. コミュニケーション能力を高めるためのリフレクション・シート開発と教育効果の検証
6. 英語で実施されている体育実技・演習科目の状況調査

4. 研究成果

本研究では、米国のカレッジインパクト研究をもとにした研究背景と成果を踏まえ、大学初年次における体育実技・演習の評価尺度を開発し、全国規模で教育効果を測定することが目的として研究を進めてきた。

2016 年度には「レディネス・テスト」開発のための予備調査を実施し、2017 年度には学会等でその内容を発表し、質問紙や実技テストの内容を精査した。そして、2018 年度にはその成果を論文 (大学教養体育における高大接続についての一考察 ベースボール型授業におけるレディネス・テストのトライアル -) としてまとめた (2019 年 6 月に論文発行)。

コミュニケーション能力を高めるための「リフレクション・シート」の開発については、2018

年度に全国の複数の大学の協力を得て広く調査を実施した。複数の学会での発表を経て、2018年12月に論文(大学体育授業におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの開発の試み)を発表した。2019年には、大学教育学会にて『大学体育実技授業におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの効果』として発表し内容をさらに発展させた。

「初年次教育における大学体育授業の意義と役割に関する調査研究」では、教育内容に対する学生の嗜好性などから授業の意義や役割について考察を加えた(2017年3月に口頭発表)。

卒業時あるいは卒業後に大学体育の意義についてどのように捉えているかを探るために、2018年の9月(1000名)と11月(1800名)に調査を実施した。学会等での発表を経て間もなく論文誌に掲載予定である。

英語による教養体育実技に関しては、2018年度はアンケート調査や担当教員に対する調査を行い論文(授業用ウェブサイトを活用した英語による体育実技)として報告した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 田地陽一、坂本友里、深津佳世子、小池亜紀子、北徹朗、飯田薫子、王宝禮	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 女子大学生の骨量に及ぼす運動習慣と栄養摂取の影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京家政大学研究紀要（自然科学）	6. 最初と最後の頁 pp.71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yoichi Tachi, Yuri Sakamoto, Akiko Koike, Kayoko Sasaki-Fukatsu, Kaoruko Iida, Tetsuro Kita, Pao-Li Wang	4. 巻 Vol.5, No.1
2. 論文標題 The Effect of Habitual Exercise on The Height of Female University Students	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Fitness, Health, Physical Education & Iron Games	6. 最初と最後の頁 pp.1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 北徹朗、森正明	4. 巻 第36号
2. 論文標題 授業外教育プログラムの展開と意義 体育教育におけるラーニング・ブリッジングの事例	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中央大学保健体育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北徹朗	4. 巻 Vol.9
2. 論文標題 大学の教養体育授業（ゴルフ）が大学・地域・産業を繋いだ事例 - 新学問領域「連携教育科学」の提案と地域活性化の可能性 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域活性研究（オンラインジャーナル）	6. 最初と最後の頁 オンラインのためページ番号無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林勝法、北徹朗	4. 巻 112号
2. 論文標題 高校3年生の大学体育とスポーツに対する意識	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学体育	6. 最初と最後の頁 pp.50-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ハラルド・ポルスター、小林勝法、北徹朗	4. 巻 112号
2. 論文標題 授業用ウェブサイトを活用した英語による体育実技 College Physical Education in English using a website for classes	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学体育	6. 最初と最後の頁 pp.38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平工志穂、小林勝法、北徹朗、中山正剛、小谷究	4. 巻 112号
2. 論文標題 大学体育授業におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの開発の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学体育	6. 最初と最後の頁 pp.42-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北徹朗、永井延宏	4. 巻 112号
2. 論文標題 ゴルフ授業のティーチング・ティップス テニスコートを利用した授業の実践報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学体育	6. 最初と最後の頁 pp.46-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北 徹朗、森 正明	4. 巻 35
2. 論文標題 ベースボール型におけるペットボトルを用いた投動作のドリルとその効果 大学初年次学生を対象として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中央大学 保健体育研究所紀要35号	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北 徹朗、森 正明	4. 巻 37
2. 論文標題 大学教養体育における高大接続についての一考察 ベースボール型授業におけるレディネステストのトライアル -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中央大学保健体育研究所紀要37号	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 北徹朗、森正明
2. 発表標題 オーティエンストレスポンスシステムを導入した授業実践 - 健康教育系講義における事例報告 -
3. 学会等名 第24回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北徹朗
2. 発表標題 教養教育科目と産業界との連携事例 - ゴルフ産業との産学連携 -
3. 学会等名 産学連携学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北徹朗、永井延宏
2. 発表標題 ゴルフ授業のティーチング・ティップス - テニスコートを利用した授業実践の試み -
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平工志穂、小林勝法、北徹朗、中山正剛、小谷究
2. 発表標題 大学体育実技におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの開発
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北 徹朗
2. 発表標題 ベースボール型授業のティーチングティップス
3. 学会等名 第1回するみるささえるスポーツ教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北 徹朗、森 正明
2. 発表標題 大学体育授業におけるレディネステストのトライアル - 初年次のベースボール型体育実技を対象として -
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北 徹朗
2. 発表標題 体育教育における高大接続についての一考察 ベースボール型におけるレディネステストの試行
3. 学会等名 日本教育実践学会第20回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林勝法、平工志穂
2. 発表標題 大学体育授業におけるループリックの活用
3. 学会等名 第5回大学体育研究フォーラム・平成28年度九州地区大学体育連合春季研修会 ラウンドテーブル
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山正剛、小林勝法、平工志穂、北徹朗
2. 発表標題 初年次教育における大学体育授業の意義と役割に関する調査研究
3. 学会等名 合同開催 第5回大学第5回体育研究フォーラム・平成28年度九州地区大学体育連合春季研修会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山正剛、小林勝法、平工志穂、北 徹朗
2. 発表標題 大学体育授業は初年次教育の役割を果たしているのか
3. 学会等名 第7回大学体育スポーツ研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平工志穂、小林勝法、北 徹朗、中山正剛、小谷究
2. 発表標題 大学体育授業におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの効果
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林勝法、北 徹朗
2. 発表標題 大学体育・スポーツに対する卒業生1,800人の経験と意識 - 1970年から2014年の卒業生を対象とした調査より -
3. 学会等名 第8回大学体育スポーツ研究フォーラム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平工 志穂 (Hiraku Shiho) (30302821)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	中山 正剛 (Nakayama Seigo) (40441787)	別府大学短期大学部・その他部局等・准教授 (47605)	
研究分担者	小林 勝法 (Kobayashi Katsunori) (70225499)	文教大学・国際学部・教授 (32408)	